

曲がり角にきた 酪農の肥培かんがい

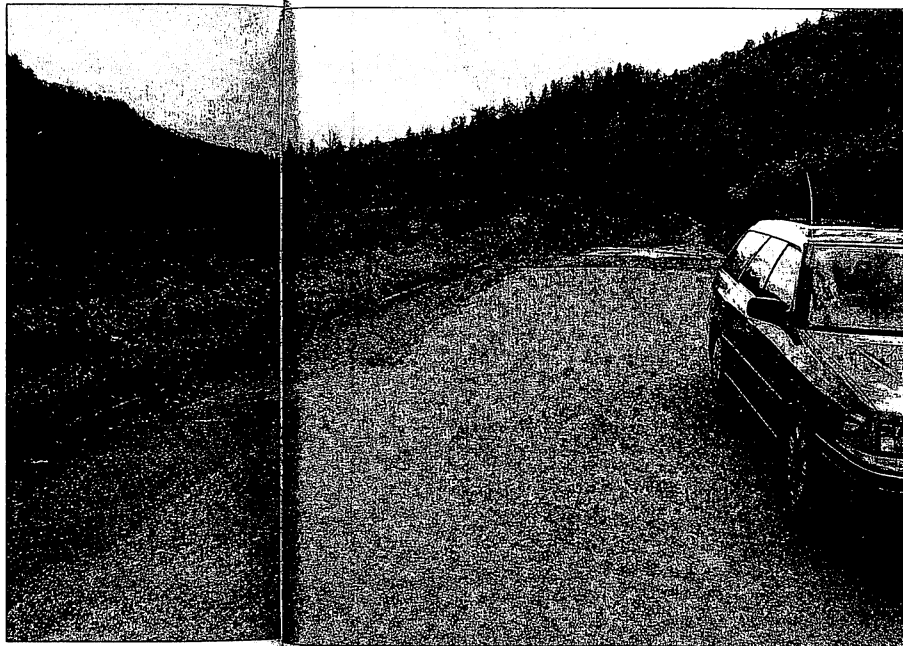
従来型の計画を 大胆に見直しして 簡易な還元策を

ダム建設を中止 歌登町の英断

宗谷管内歌登町の市街地から南に三十キロあまり行った大曲地区。山あいを流れる徳志別川に沿って町道が走り、真新しい橋もいくつかある。国営かんがい排水事業の要となる歌登ダムのために整備されたものだ。

歌登ダムは本年度から堤体工事に着手し、二〇〇一年度には完成するはずだったが、建設予定地では何も行なわれていない。ダムの水を使う肥培かんがい事業への参加を断る酪農家が相次

費用負担に難色を示す酪農家、財政圧迫を懸念する地元自治体——ダムや用水路の建設など大がかりな土木工事を伴う、道開発局の国営肥培かんがい事業が曲がり角にきている。いまこそ事業を大胆に見直し、シンプルな糞尿還元策を具体化するときだ。まず、道北各地の実情をレポートする。



歌登町では肥培かんがい事業の要となるダム建設が着工直前で中止された。左手の徳志別川の支流にダムを造る計画で、すぐ手前まで町道の整備が終わっていた。

ルポライター 滝川 康治

ぎ、昨年、瀬戸際で建設中止の流れが決定的になったためだ。山の中で途切れた道路と人けのない予定地の光景はこの計画の詰め甘さを物語る。

歌登町農林課によると、この事業は八五年に具体化し、九二年度から実施されているものだ。当初は百十九戸が利用を希望し、農家の意気込みもあった。町としても「受益者負担分については町が責任を持つ」と言ってきた。「(岩花正課長) ほど力を入れた。当初の総事業費は二百億円。ダム(総貯水量150万トン)から農家に水を引き、牛の糞尿と混ぜて薄め畑に散布する計画。最も遠いところではダムから九十五キロも離れた農家に送水する、とい

う無謀きわまりない内容だった。

が、昨年になって町と事業主体の道開発局が農家の意向を調べたところ、希望は二十四戸へと激減し、事業は中断した。酪農情勢がきびしさを増すなか、利用料などの負担に耐えきれない、と農家にそっぽを向かれたのだ。

「当初の戸数でやっても無理があったのに、二十四戸では不可能な話ですよ。事業年度が長すぎて、戸数が減るのに事業費が膨らんでいく。我々は開発局の犠牲になっておられないんです」と話すのは、受益農家をつくる期成会の会長・秋川亀美さん。事業が中断してからは対応を町に任せて、期成会の活動は一切やっていない。

最近の試算で、事業費は当初計画の二倍(400億円)に膨らみ、一割程度とされる町の負担額も増えることが分かった。人口二千七百人ほどの過疎の町には手痛い出費だ。中断の背景に

は、財政圧迫への不安もあった。

開発局はこうした状況について、「二期せぬ事態が発生し、町が負担についていけなくなり、中断せざるを得なくなった。地元は簡易な取水方式を希望しており、計画変更のための見直し中。この規模(20数百)で肥培かんがいが可能かどうか検討している。受益者の意向に沿って考えたい」(農業水産部農業計画課など)

と柔軟に見直す姿勢を見せるが、みずからの計画自体に無理があった点は認めたくない。

この事業を批判してきた、同町内のある農家はこんな話をする。

「ほとんどの農家は『終わった話』と受け止めている。いま、酪農家は六十四戸いるけれど、まだ減る。九五%の補助金が使えらるなら、堆肥づくりによる地力増進など、みんなが生きられる方法を考えたほうがいい。ダム造りは

業者のための事業だった」
農水省のダムが着工直前で中止になったケースは全国的に珍しく、波紋を広げた歌登町の勇気ある撤退。その経緯をたどるとき、従来型の農村整備事業の問題点が透けて見える。

費用負担に難色 技術面の課題も

「国営事業で導入しているのは北海道だけ」(開発局)という肥培かんがい事業は、七〇年代から道内各地で試みられてきた。図のようなシステムで、液状糞尿(スラリー)とかんがい(イリゲーション)とを組み合わせた道語「スラリーイリゲーション」という別名もある。かんがい用水は、腐熟・発酵させたスラリーの希釈水などに使われる。

「酪農が大規模化するなかで、発生した糞尿利用が十分図られていない現状がある。よりベターな活用方法として、肥培かんがいは有効な手段。(スラリーの散布で) 反取を三割上げることができる。生産費の削減ができて、酪農振興の一助にもなる。環境問題に対応し



各地にある試験圃場の看板（幌延町内で）

トンの幌延ダムを建設し、約八十キロにわたる用水路をめぐらせて各農家に水を送り、肥培かんがい施設を整備する計画だ。総事業費は約二百七十四億円（国・道・地元3者で負担）。二〇〇六年までの一期工事には十六戸が参加する予定になっている。

十月のある日、三人の酪農家が肥培かんがいの話をしていた。いずれも受益農家に名を連ねた人たちである。

「農家全部が参加しないと事業にならない」と町に言われて、息子が判をついた。苦勞して金をかけても、いまの乳価じゃ太刀打ちできない。維持費がど

れくらいかかるのか分からない」「事業の中身を知らずに、『役場や開発局のやることだからいい』という人が多いんだ。本当にやりたい人は十〜二十戸じゃないか。あれは開発局の人間の飯の食いダネだよな」

「農家の収支が合わんなかで、農協組合長が『かん排をやれ』と旗を振る理由が分からん。年三百万円の経費を出すには一千万円以上の水揚げがないと合わないよ。幌延は防火水槽が足りずに、消防の水が馬の小便くらいしかない。そっちを整備するほうが先だ」

「最後のツケは町民にくるけれど、考えていない若い人が多いんだ」

三人の話から明らかなように、肉牛価格の低迷などもあって、雄の濡れ仔の値段は千円から二千円、ちょっと具合が悪いのだと追い銭がいる。あまりの値段の安さに天塩川に生きた子牛を流したり、市場の隅りに農家の庭先へ捨てていくケースもある、とか。肥培かんがいに期待を託す余裕などないようである。

話題にのぼった幌延町農協の木村誠組合長を訪ねてみた。

八〇年代初め、事業採択を求めて農

水省に陳情に行った。当時の事業費は百二十億円、着工は二十年後の予定だった。町が低レベル核廃棄物施設の誘致に力を入れていた時期である。

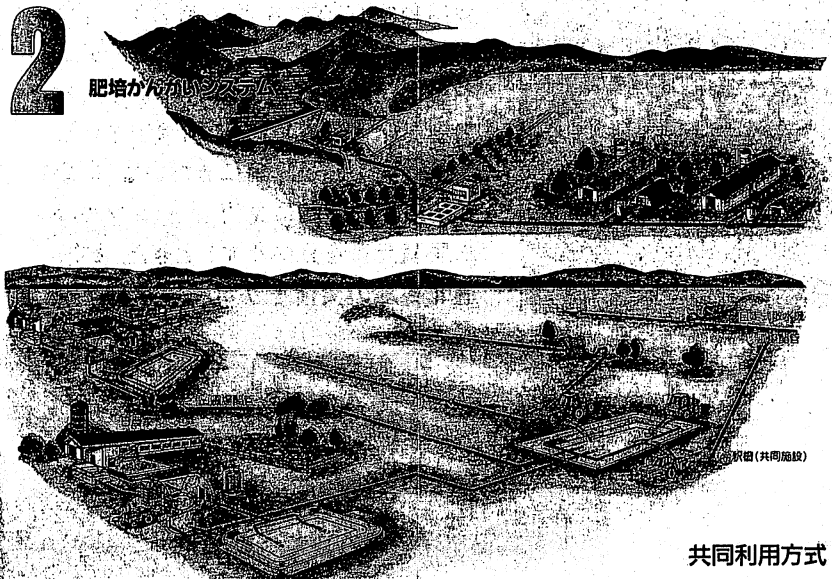
木村組合長と成松町長（故人）は、「低レベルがくると銭が湯水のように入るから、（農家に）五千万借金があってもなくなる。年三〜五億円の施設維持費も出てくるし、環境整備もできる」と夢を語っていた、という。二十年近い歳月が流れたいま、木村組合長は悩んでいた。期成会のなかに検討部会を設け、議論も進んでいる。

「ダムの維持管理費の試算が開発局から出てこない。電気代などの経費も大雑把な試算しかない。糞尿の処理方式もはっきりしない。ダムまで造らず、川から取水して施設だけやればいい」という議論もある。今後については流動的な面があり、来春までに検討部会と相談して話していきたい」

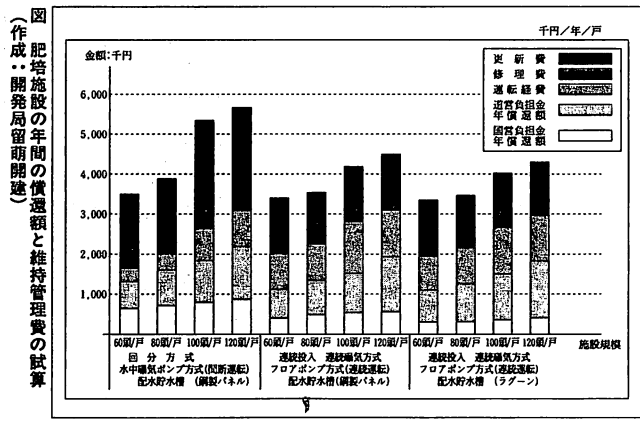
と木村組合長。かつての夢は消え失せ、酪農情勢のきびしさを痛感しているようだった。

事業推進に熱心な町は、「最終的には対象農家が何戸になるかは分からない。町の負担は覚悟しているが、いかに効

道開発局が指し、肥培かんがい事業の概要図



共同利用方式



実施中のところは、前出の歌登をはじめ天塩（2）地区、幌延、枝幸、猿払、雄武、滝上、清水町御影、標茶の十地区にのぼり、千五十戸、合計三万七千ヘクター

ルを対象にした事業とされる。さらに、稚内

市沼川と別海（実施設計中）、浜中（調査中）にも計画がある。

こう書くと、事業は着実に浸透している印象を受けるかもしれないが、事実はかなり違う。

施設整備ががかりになり、償還金の返済や維持管理費などの負担を伴うことから、利用をためらう農家の声が根強くあり、千五十戸での肥培かんがいは実現しそうにない。開発局が試

計画縮小は必至 幌延でも慎重論

留門管内幌延町では七十七戸の酪農家（開選別地区を除く）を対象に事業がすすむ。ベンケエベコロベツ川（天塩川水系）をせき止めて総貯水基百万

算した償還金と維持管理費の比較表（別項のグラフ）を見ると、年間三百〜五百万円台の費用がかかる、とされている。これらを負担しつづける経営環境にない農家が多いのである。

また、肥培かんがいは牧草の収量増や化学肥料の節減、環境改善などに一定の効果があるものの、

①電気代などの運転経費が高い
②機器類が故障したときの交換・修理費用がかさむ
③スラリーの発酵や搬送・散布時の技術が確立していない

といった問題点が指摘されており、「開発途上の技術」の色彩が濃い。現在の方式が採用されてから二十年が経過したにもかかわらず、現場の農業関係者の評価はそう高くない。

率よく公共事業をやるのか、我々もすっかりしなければ……」上田密春農林課長と、慎重姿勢にもじませる。

町議会でも何回か議論されており、農林議員には慎重論が根強いらしい。最終的には、参加農家は一部にとどまることが予想される。現計画のままダムや用水路を建設するならば「無用の長物」と化するのは必至であろう。それらの公共投資は、農家ではなく、一般国民が負担することになる。

計画に冷めた目 道北各地の声

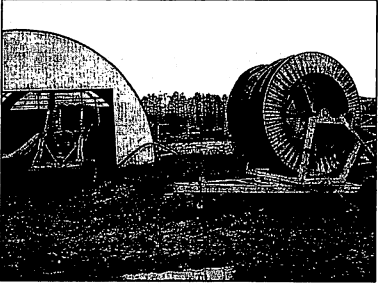
ほかの道北の町も同工異曲の様相を呈している。

猿払村では昨年、笠井村長が「農家や村の負担が多くなるようなら事業の再考が必要」と表明した。ここでは、鬼志別川の上流に総貯水量三百五十万トンのダムを建設する計画だったが、「地元の意向に沿って見直したい」「開発局」という話になった。村では、「農家の話を聞くと、この種の施設には資金がかかりすぎて整備するのは無

理、という感じ。経済情勢が悪化するなか、望まないものを押しつけるのは時代に合わない」（産業課）と話す。

稚内市沼川地区では、宇流谷川（声間川水系）の上流に総貯水量三百六十万トンのダムを造り、百戸ほどの農家を対象に事業を行なう計画がある。三年前、市の担当者はわたしに事業のメリットを熱っぽく語った。が、今回は全く違っていた。

「農業情勢が変わり、地元負担が大変」と農家の意識がシビアになっている。本年度、開発局が農家の意向調査を行なっており、その結果によって参加戸数や必要な水量、整備方法などが定まり、計画が練り直されるでしょう。何



スラリーを畑に還元するには大型の散布装置(右)が必要になる

十戸かの話となれば、ダムまでは必要なくなるのではないかと、松下徹・市農政課長が見通しを語る。市の調査によると、百九十戸の農家のうち尿溜がないところが四三％にもほり、何らかの対策が必要だが、その手法として肥培かんがいを選択する農家は少ないのだろう。

この事業の期成会のある役員は「対策の必要な人は、ほとんどが道営事業で堆肥盤などを整備している。こうした事業は、組織的・画的にやるのではなく、きめ細かくやる必要があるのではないかと」注文をつける。

道北のなかで事業が最もすすむ天塩町でも、規模縮小の動きが出ている。同町では、沿岸地区（受益農家111戸）と平原地区（同137戸）の二カ所で事業を行ない、それぞれ貯水量百万トン台のダムを造る計画だった。しかし、ここに至って平原地区のダム計画を縮小し、ため池にする方向になっている。同町内のある酪農家は、

「昭和五十年代からの計画なので、多くの農家は『やらない』とは言えず、いちおう参加希望を出し、模様眺めをしている。自治体も正面きって開発局

に『やめたい』とは言えない事情がある。道の負担額が大きい事業なので、道がきちんと代案を示すべきだ」と実情を語り、代案で対応することの大きさを指摘していた。

投資を上回るほどの経営効果を見いだせず事業参加を躊躇する農家、財政圧迫を懸念する自治体……。こうした事態について、開発局は、

「我々は農家の意向が変わったら、柔軟に見直して対応してきた。他の公共事業にはないやり方をしているのではないかと。計画変更にあたって別な案も考えており、そのためにも農家の意向を聞いていきたい」（農業水産部）と柔軟に対応する姿勢を強調する。

が、肥培かんがい以外の具体的な代案となると、「国営事業のなかで糞尿対策を取り込めるように努力しているが、思うようにいかないのが現実」と、その難しさも認める。

まさに、転換期にあるのが公共投資としての肥培かんがい事業だ。大がかりな土木工事や施設整備によらない、シンプルな糞尿還元策こそ急務といえる。そうした「代案」について、次号以降で紹介したい。（つづく）